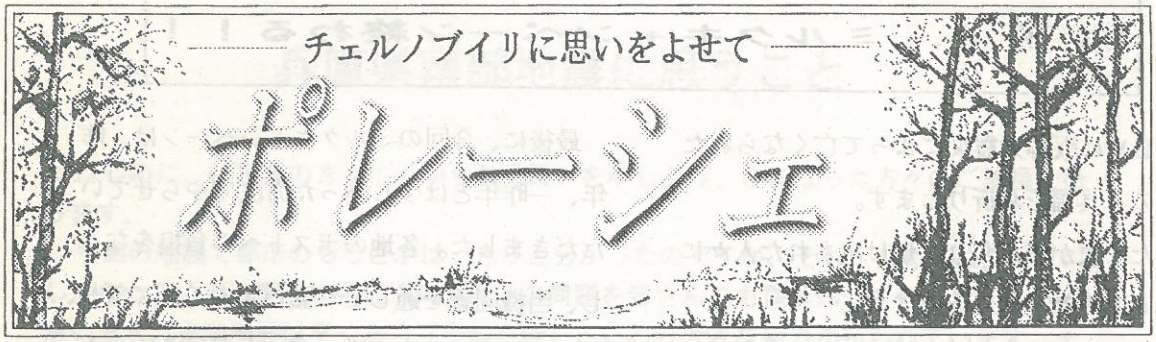


NO. 25 1995・1・31 チェルノブイリ救援・中部

阪神大震災の被災者のみなさまに
心からお見舞い申し上げます。

チェルノブイリ救援・ 中部では、浜松を事務局にミルクキャンペーンを（94・12・24~95・2・23）展開してきました。しかし、突如襲ったこの大震災は他人事ではなく、私達は緊急運営委員会を開き 早急に支援することを決定しました。
ウクライナの移住基金からも、次のようなお見舞いのファックスが届きました。

“こんにちは、日本の地震についてお気の毒です。移住基金委員会のメンバー全員は、ふりかかった災難と人々の大きな犠牲に対し深く哀悼の意を表します。当地のラジオも一時間ごとに、日本の地震について報道しています。移住基金委員会は皆様が我々の救援を停止し、すべてのお金を犠牲者に送ってはどうかと考えます。” 1995，1，17

“ブレドネヴァ医師（ラリーサさん）から、移住基金委員会に申し入れがあって、私たちのために集めたお金を地震の被災者の救援のために使うよう、皆様に確認してほしいとのことです。私たち（移住基金委員会）も全面的に彼女に賛成し、皆様がこの提案を聞いて下さるようにお願いします。私たちは日本の出来事を緊張してフォローしています。” 1995，1，24

この提案に応えるためにもミルクキャンペーンは、1月30日で打ち切り被災者支援の活動を2・1～4・30の予定で展開したいと思います。
ご協力よろしくお願いいたします。

振替口座 00880－7－108610
チェルノブイリ救援・中部 《震災支援》と明記して下さい。

９４，ミルクキャンペーン終わる！！

はじめに阪神大震災によって亡くなられた方々のご冥福をお祈りします。

また、家が壊れたり、焼け出された人々に心からお見舞い申し上げます。

一刻も早い再建を願わずにはいられません。

「世界を震撼させたあのチェルノブイリ原発事故から8年・・・」と皆様に救援活動のお願いをして約１カ月間、カンパをなさった人、これからしようと思っている人、学校をあげてメッセージカードを仕上げてくれた子どもたち、使わなかったミルクとお金を送ってくれたお母さんなどなど、本当にありがとうございました。皆様のご協力により、

カンパ　242口、総額 1,836,296 円、

も集まりました。早々に現地に向け送らせていただきます。(1,31現在)

今日のウクライナは独立したとはいえ大変です。幼い子どもたちや赤ちゃんに必要な医薬品や粉ミルクもまだまだ不十分です。

1月17日、ジトーミルの「移住基金」から阪神大震災に対してお見舞いの言葉をいただきました。チェルノブイリのための救援活動を地震の被災者に回したらどうかという心遣いもありました。こうした「移住基金」の願いと私たちの率直な気持ちから、９４，ミルクキャンペーン期間を短縮し、終了させていただくことになりました。阪神大震災の被災者のために引き続き皆様の暖かいご支援をよろしくお願いします。

最後に、今回のミルクキャンペーンは、昨年、一昨年とは少し違った方法でやらせていただきました。各地のポストへの負担をなくし、当機関紙を通じてお願いすることになり、メッセージカードを書いていただける方にだけ、お渡ししました。少し遅れましたが立派なポスターもできあがり、さあこれからという時に、あの大震災に見舞われ、上記の理由で急拠キャンペーンを変更させていただきました。

９４，ミルクキャンペーンについてご意見、ご感想のある方、是非お聞かせ下さい。

最後の最後に、全国の皆様、本当にありがとうございました。

９４，ミルクキャンペーン事務局
チェルノブイリ救援基金・浜松

《事務局より》なお、ミルクキャンペーンは、今回は阪神大震災支援のため、期間を残して終了しましたが、次回９５年１０月１日より、１２月末まで展開しますので、ご協力をお願いします。

兵庫県南部地震に思うこと

はじめに、被災者の方々に心からお見舞いを申し上げ、亡くなった方々のご冥福を祈ります。

今回の地震で都市のもろさがはっきりと分かったのですが、それとともに頭に重くのしかかってくる”東海地震と浜岡原発”の問題を皆さんにも是非知っていただきたいと思います。東海地震は早くから「予知可能」といわれ大きな努力が払われています。それは今回の兵庫南部地震（マグニチュード７）よりも規模が大きく、マグニチュード８クラスの地震が予想されるからだそうです。エネルギーで言えば今回の３０倍大きいのです。いざ本当におこったら、どんなことに成るのか想像もつきません。問題は、予想震源域が、静岡県の御前崎沖だと言うことなのです。

予想震源域の真上に浜岡原発が現在四基運転中で、五号機をつくる動きもあります。電力会社は関東大震災（マグニチュード7.9）クラスの３倍の地震にも耐えられる、と説明していますが果たして信頼出来るでしょうか。この度の地震で、あり得ないはずの高速道路や新幹線の倒壊という事態をみると、原発だから大丈夫とはとても思えません。浜岡原発の敷地内には今回問題になった活断層がいくつも走っています。通産省の『発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針』によれば直下型地震の場合、マグニチュード6.5に耐えれば良いことになっており、もし直下型ならば今回の兵庫南部地震程度でも耐えられなかった可能性があります。

原発は地中深い堅い岩盤に杭を打って支えているから大丈夫、というのですが地盤と一緒に原発が揺れ動けば安全と言うわけにも行きません。長い配管や様々な装置がぶら下がっており、共振等によってバラバラに揺れ動き壊れてしまうからです。地震の揺れを”ガル”という単位で表しますが、浜岡１、２号機は耐震が３００ガルまで、３、４号機は４５０ガルまでというのも変な話です。

もし東海地震が起こったら、地震の被害に加えてチェルノブイリのような放射能の被害も加わる、と思うと背筋が寒くなります。

大量の放射能は被害の範囲をはるかに大きくするでしょうし、第一放射能を承知で駆けつける消防士や自衛隊員、警察官が果たしているでしょうか。

静岡県では、防災対策のために東海地震による全県下の被害予想シミュレーションをやっていますがなぜか東名高速道路と浜岡原発は計算の対象から外されています。なぜなのでしょうか。（河田昌東）

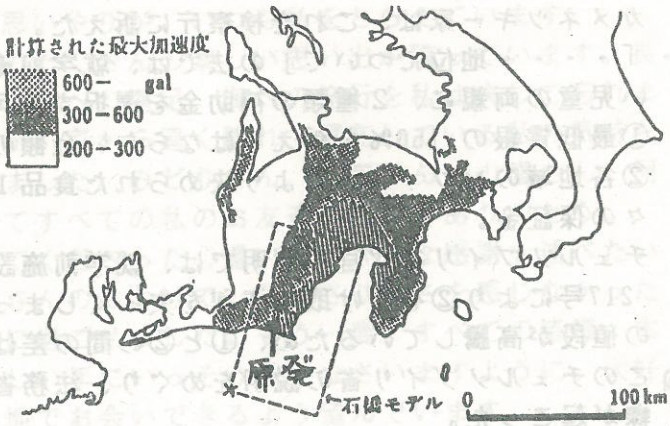


図 8.19 “仮想東海地震”による各地の最大加速度分布の推定
（翠川三郎・小林啓美：日本建築学会論文報告集，290，83-94，1980）

現地から

チェルノブイリ救援・中部のスタッフとして、キエフ大学に留学している竹内さんからのＦＡＸで現地からの情報が寄せられました。医療研修で来日したリューダさんからもメッセージが届いています。

アンドリューシャ君への補償　（竹内さん訳）

（『全ウクライナ新報』294年11月22日号　要約）

「チェルノブイリ原発事故の後遺症から住民を保護する省（チェルノブイリ省）」の任務には、汚染地域からの住民の移住、食品の質のチェック、被災者証明書の発行、その他、「チェルノブイリ惨事による被災者の社会的保護及び地位について」という法律の実施状況の監査がある。これらの課題をチェルノブイリ省はいかに遂行しているのだろうか？

・法的には移住させられるべきであるのに、未だ補償を受けていないため移住できない住民たちが、ヴォルインスク州マネヴィツク地区ガルジヤ村、ブルスノエ村（970世帯、児童1000人以上）、チェルニゴフ州レプキンスク地区レジコフカ村（19世帯）、ロヴェンスク州ドゥブロビック地区の二つの村（655世帯）などに住んでいる。

・ウクライナの「汚染」諸州では薬や食品の補償が行き届いていないため、学校の食堂なども、次々と閉鎖されている。チェルノブイリ関係の補償についての政府の負債は、ヴォリンスク州だけで、'94年７月１日1850億クーポンに達している。

・ロヴェンスク州、ヴォルインスク州、キエフ州の被災者証明書を持つ住民の約３０％が生活保障を受けていない。

・これらに対する説明は、――――国の財政難のためだというのである。

就学前児童のアンドリューシャ・カメネツキー君は、政府から月々の食費補助金を受け取っていたが、'94 年４月から補助金支払いが中断されてしまった。カメネツキー家は、これを検察庁に訴えた。

・「・・・・地位について」の法では、就学前施設（幼稚園など）に通っていない児童の両親に、２種類の補助金を選択する可能性を規定している。

①最低賃銀の 150％を越えてはならない金額の月々の保証金。

②各地域のソヴィエトにより決められた食品１セットの値段に相当する額の月々の保証金。

チェルノブイリ省次官の説明では、就学前施設に通っていない児童は、内閣令 217号により②を受け取る権利を失ってしまったというのである。しかし食品の値段が高騰しているため、①と②の間の差は若干の地域でははなはだ著しい

このチェルノブイリ省の説明をめぐり、法務省とチェルノブイリ省との間に軋轢が起こった。

11月９日、キエフのシェフチェンコ地区裁判所で、チェルノブイリ省の説明は法律違反であると認められた。

リューダさんのメッセージ

親愛なるお友達！

私がウクライナに戻ってから、もうすでに３か月になります。そして、皆様が私に対して払ってくださった配慮や、私たちの国の子どもたちのためにしてくださったすべてのことに、自分の感謝の気持ちを表すことができるのをとてもうれしく思います。私はすでに２度日本を訪れましたが、２年前と同じように、この国とそこの人々のすばらしさに魅了され続けています。私は、新生児用の保育器のための資金集めがどのように行われたかを知り、２つの国がこんなにも遠く離れているのにもめげずに、私たちの幼い患者を助けようと努力している普通の人々に深く頭が下がります。"チェルノブイリ救援・中部"を構成するすべての方々にかぎりなく感謝いたします。

日本への旅行は、私にとって専門的見地からもまことに貴重でした。３週間の間、私は名市大病院の仲間のもとで血液学を学びました。矢崎医師は、私の訓練に多くの時間とエネルギーをさいてくださいました。私はこのことでとても恐縮しています。というのは、日本のお医者さんがどれほど忙しいかを知っていますし、彼らにはたくさんの仕事があるからです。私はこの３週間に非常に多くのことを習得しました。私は骨髄移植を体験することができましたし、いつかこのような治療をウクライナの私たちのところで行うことができるようになるという希望が生まれました。忍耐強く私に自分の知識を伝授してくださったすべての医師たちに、もう１度"ありがとうございました。"と言いたいと思います。

岐阜県立病院の栗本医師との出会いは、私に大変喜ばしい印象を残しました。この方は、真のスペシャリストかつすばらしい教師でした。彼との出会いは、私にとって非常に刺激的だと思われました。その仕事の中で、私にとって必要不可欠な多くのことを習得しました。私はいつも感謝の気持ちとともに、日本の医師たちとの出会いも思い出すことでしょう。

私は、私たちの災難と私たちの問題を、自分自身のことのように受けとめているたくさんの新しい友人が私にできたことを、とても喜んでいます。あおの第一番にチェルノブイリ救援・中部のメンバーがおられるのです。皆様、本当にありがとう。あなたがたのやさしさと思いやりが、いつも私をとらえています。

私には、日本の自然との出会いのたくさんの楽しい思い出が残っています。長良川河畔での友情あふれる夕べや、山への遠足、海への旅行を私は決して忘れません。たくさんのすばらしい人々が、家から遠く離れて滞在している私の気持ちがほぐれるように努力して下さいました。みどりさん、新田さん、山盛さん、河田さん、まやさん、宣さん、そしてすべての私のお友達の皆様、ありがとう。

松浦さん一家が私のために払ってくださった心遣いに、大きな感謝を述べたいと思います。ちあきさんとさとしさんのおかげで、私はさびしさを感じなかったし、彼らの家でとても健康に快適に過ごせました。もう一度、すべての皆様、本当にありがとう。皆様すべてが新しい年にいっそう発展なさいますように。大好きな皆様と、今度はウクライナの地でお会いできるよう望んでいます。

心をこめて　　リュドミラ・チュムト

１９９５年１月３日

特集「種の絶滅時代と遺伝子汚染」第３回

（講演内容から抜粋；河田昌東１９８９・１１・２１）

（紫外線；続き）植物に紫外線が当たると遺伝子がやられて光合成ができなくなり、生育が悪なったり実を付けなくなったりする、ということも実験で確かめられています。また、水中の微生物プランクトンも紫外線で生存が危うくなり、食物連鎖で生きているもっと大きな生物にも影響がでます。（紫外線を増やす）フロンはここ３０年ぐらいずっと増え続けています。フロンは半導体産業の浄剤やクリーニング屋さん、冷蔵庫、　ウレタンの発泡剤、スプレー等いろいろなところに使われています。最近世界的にフロンを減らそうと言う動きが活発ですが、フロンは安定な物質ですからいったん環境にでてしまうと相当長い期間残留し続けると覚悟しなければなりません。

◆熱帯林の破壊

石油や石炭を燃やすとその中の硫黄分が酸化して硫黄酸化物が出来たり、高い温度で物を燃やすと空気中の窒素が酸化して窒素酸化物が出来ます。これらが硫酸や硝酸の雨になるのです。日本も１９６０年代から７０年代にかけて深刻な酸性雨の時代がありました。四日市喘息の原因になった亜硫酸ガスは脱硫技術の発達で解決可能になりました。今は窒素酸化物や、中国大陸からの酸性雨が問題になっています。ヨーロッパではとても深刻です。スエーデンの湖のＰＨは１９７９年には４、５まで低下しました。ふつうは６とか７です。見た目には透明できれいでも生物はいないのです。酸性雨でもっとも深刻なのは地面が酸性化して植物の根がやられ養分の吸収能力がなくなり枯れてしまうことです。また、土の中のミネラル等が溶け出して植物が利用できなくなってしまうのも大問題です。生態系全体が破壊されてしまうのです。結局、酸性雨問題の解決は化石燃料をやたらに使わない、ということしかないのです。

◆酸性雨の問題

乱開発や焼き畑などで森林が破壊されるのも遺伝子にとって脅威です。フィリッピンはかつて国土の６０％が熱帯林だったと言われますが、今では９％しか残っていません。その８０％は日本輸出しています。日本は世界で最大の木材輸入国です。世界中の木材輸入の５０％は日本が占めてます。建物をつくるとき合版のコンパネという物を使いますが、そうした形で木材をどんどん使いすてているのです。世界で一番木材を輸出しているのはマレーシアです。アジア、アフリカの国々では乱開発による激しい砂漠化が起こっています。生活が厳しいので以前より焼き畑が盛んになりいっそう破壊が進んでいます。

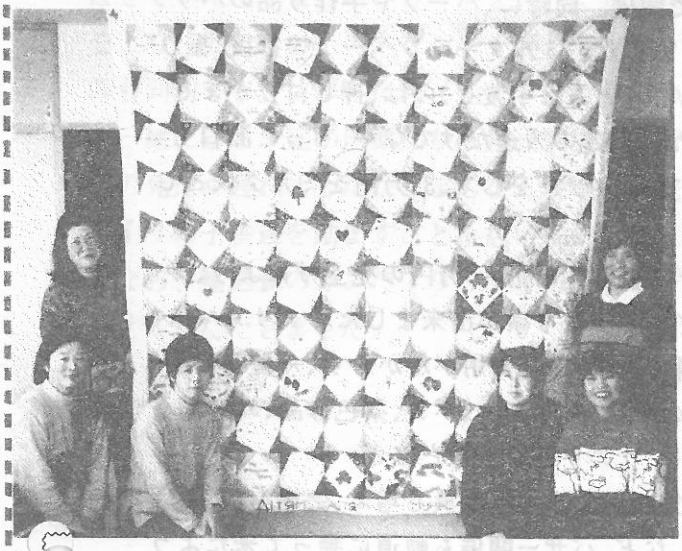
私たちの身の回りにも長野オリンピックや万博、ゴルフ場など乱開発は進んでいます。これらも局地的ではあってもそこに棲む生物にとっては脅威です。

◆野生動物の保護

人間は本当に困ったもので、象牙を集めたり貴重な野性生物をつかまえて商売したりするので、大型野生動物は今絶滅の危機にさらされています。国際的にはワシントン条約というのがつくられ野生動物をむやみに売買出来ないようになりました。日本はこれを１９８０年に批准はしましたが、実行のための国内法を作ったのはやっと１９８７年になってからでした。これも尻抜けで、国際的な保護対象の半分くらいしか国内法では規制していないようです。それでも、国内法で動物は５００種類、植物は１３０種類、売買や譲渡をしてはいけない事になりました。それでも生物は減っていきます。生物にとっては環境の破壊が一番問題で、環境がどんどん悪くなっていくのに、あの動物を捕らないようにしよう、といっても間に合わないのです。（続く）

Майбутньому – мрію!（明日に夢を）

１００人で作ったキルトがウクライナへ飛び立ちました



左の写真は“かざぐるまフレンドシップきると”という名のキルトです。
ひとりひとりが１枚ずつ縫った小さなキルトが １００枚 あつまってできています。
小さなキルトが ４枚あつまると、そのまん中に かざぐるま ができるんです。それで“かざぐるまキルト”といいます。

キルトに縫いこめられたメッセージは、ウクライナ語。名古屋のタチアナさんに教わりました。

「いつも みなさんのことを思っています」「ノーモア・チェルノブイリ」
「お母さんたちが 手をつないで 子どもたちを守りましょう」
「がんばれ チェルノブイリの子どもたち」・ｅｔｃ・

ジトーミルの子どもたちの病院に 置いていただいて 病気の子どもたちと そのお母さんたちを すこしでも はげますことができれば とてもうれしいです。

（大垣のムラサキツユクサの会）

クリスマスリースやハーブクラフトで チェルノブイリ救援バザー

救援・一宮つぼみを守る会　中島しぐれ

板東さんの「とどけウクライナへ」を通して、私はチエルノブイリ救援・中部を知りました。91年ミルクキャンペーンの折、友人知人に呼びかけたところ、40人を越える方々がカンパを寄せて下さいました。

翌92年、活動を日常的なものに出来たらと思い、一宮でのキャンペーンのポストをされた広瀬さんと話し合い、「つぼみを守る会」を発案。92年4月26日、原発事故から6年目の日、木曽川の桜の里公園で会の結成式を持ちました。参加者は4名でした。

92年8月、「絵画と手紙展」を一宮市内で開催。同時に、ハーブや手作り品のバザーを行ったところ、十万円の収益がありました。ミルクキャンペーンの都度、振り込み用紙をお渡しする（切手代節約の為に近い方は手渡し）のは、押し付けがましくはないかというためらいを覚えました。特定の人達だけでなく、もっと間口を広げた活動をと思い立ち、93年12月、6日間のバザーをして、32万円をミルク代としてプレゼントする事が出来たのです。

そして、昨年12月に、7日間に旦るバザーを行った処、67万円の売上げにより、ミルク代37万円、ポレーシェの発送費などをまかなう事が出来ました。クリスマスリースは、野山をかけ巡って集めた材料で作り、殆ど費用がかからず、一番の収益となりました。パッチワークや手作りの小物、クッキー、パン、染色作品、ぬいぐるみ、皮工芸、押し花、そして畑で育てたハーブのクラフトなどなど。

一昨年は、スタッフが少なくて大変でしたが、昨年は会員も増え、会場も、喫茶店ティンバーランドを、無料で借して戴くなど、バザー開催も軌道に乗って来たようです。又、新聞、ラジオ、テレビで報道され、救援・中部の活動の一端を東海地域の方々に知って戴く事が出来ました。加えて会員にとっても、家族にボランティアの意味を理解して貰える良い機会となったようです。 冬の山に入りリースを作り、春はハーブの種を蒔き、夏は収穫と草取りに汗を流し、秋はクラフトと忙しい毎日を過ごしていますが、チェルノブイリ救援活動の中で、わたしは、沢山の友達を得る事がで来ました。 暖かい笑顔に囲まれての作業は本当に楽しいものです。

ウクライナの地で、汚染されていないミルクが欲しいと言う声が続く限り、贈り続けたい。一人一人の力はわずかでも、日本のお母さん達の心を伝える事が出来ればと願っています。 バザーやフレンドシップキルト作りのスタッフを募っております。是非御参加下さい。

一宮市今伊勢町宮後字西茶原62－5
中島方　　0586－46－0263

＜94　ハート　TO　ハート・キャンペーン＞

チェルノブイリの子供達に１　７５０通のメッセージカード

昨年１１月１０日から１２月２０日まで行っていましたカード・キャンペーンに、全国の皆様から心のこもったクリスマスカードや新年を祝うカードを１７５０通寄せていただきました。ご協力本当にありがとうございました。

今年もいろいろに工夫された手作りカードや子供達を励ますメッセージ、幼稚園や保育所、学校のクラス単位での取組に、このキャンペーンを担当したチェルノブイリ救援・名古屋のメンバー一同とても感激しました。また、今回お願いしたカードの封筒作りでもたくさんのご協力が得られ、カードの整理に携わった私たちもリサイクルの大切さや人の手のあたたかさなどを学ばせていただきました。カードを入れた封筒にロシア語のメッセージ（友情．心より．助け合い）のスタンプを押して、サンタクロースや鶴などの折りがみも同封し、ダンボール箱２箱にぎっしり詰め荷造りしました。

一緒に送る予定の医薬品が阪神大震災で入荷が遅れた関係で、ウクライナへの発送が遅れましたが、まもなく現地の病院や学校に届けられ、チェルノブイリの子供達を励ますことと思います。

なお、輸送費のカンパ１９８５０円（切手を含む）は、航空便代の一部とさせていただきました。

（チェルノブイリ救援・名古屋）

―保育器が無事に現地に着きました―
“いのちのゆりかごキャンペーン”報告

１１月に名古屋港を出航した船は、８台の保育器と２台の超音波診断機を積んで、黒海のオデッサに向かいました。

１９９５年1月3日、約2カ月かけて、無事オデッサに到着し、トラックに積み込まれ、陸路をジトーミルへ。

今頃は、病院に到着し、未熟児の赤ちゃんたちのために役立っているでしょう。皆さんから、暖かいカンパで購入した保育器が無事到着して、ほっとしています。

＜94　ハート　TO　ハート・キャンペーン＞

チェルノブイリの子供達に１　７５０通のメッセージカード

昨年１１月１０日から１２月２０日まで行っていましたカード・キャンペーンに、全国の皆様から心のこもったクリスマスカードや新年を祝うカードを１７５０通寄せていただきました。ご協力本当にありがとうございました。

今年もいろいろに工夫された手作りカードや子供達を励ますメッセージ、幼稚園や保育所、学校のクラス単位での取組に、このキャンペーンを担当したチェルノブイリ救援・名古屋のメンバー一同とても感激しました。また、今回お願いしたカードの封筒作りでもたくさんのご協力が得られ、カードの整理に携わった私たちもリサイクルの大切さや人の手のあたたかさなどを学ばせていただきました。カードを入れた封筒にロシア語のメッセージ（友情．心より．助け合い）のスタンプを押して、サンタクロースや鶴などの折りがみも同封し、ダンボール箱２箱にぎっしり詰め荷造りしました。

一緒に送る予定の医薬品が阪神大震災で入荷が遅れた関係で、ウクライナへの発送が遅れましたが、まもなく現地の病院や学校に届けられ、チェルノブイリの子供達を励ますことと思います。

なお、輸送費のカンパ１９８５０円（切手を含む）は、航空便代の一部とさせていただきました。

（チェルノブイリ救援・名古屋）

―保育器が無事に現地に着きました―
“いのちのゆりかごキャンペーン”報告

１１月に名古屋港を出航した船は、８台の保育器と２台の超音波診断機を積んで、黒海のオデッサに向かいました。

１９９５年1月3日、約2カ月かけて、無事オデッサに到着し、トラックに積み込まれ、陸路をジトーミルへ。

今頃は、病院に到着し、未熟児の赤ちゃんたちのために役立っているでしょう。皆さんから、暖かいカンパで購入した保育器が無事到着して、ほっとしています。

チェルノブイリ救援・岐阜から　**読者の皆さんへ**

1月17日、午前5時46分、阪神大震災がおきました。

私たちチェルノブイリ救援・岐阜のメンバーは何ができるか集まって相談し、避難所生活で困っている被災者を岐阜に受け入れて、まず、疲れた体と心を休めてもらおうと活動を始めました。

20日には、受け入れ準備が整い、思いつく限りの行政機関に連絡しましたが、現場もパニックで、「どうしていいか分からない」「お聞きしておきます」と言うだけで、一応登録はしてもらいましたが、今日まで行政からは何の連絡もありません。

もう自分たちで探すしかないと、現地からの情報を頼りに、重いリュックを背に、23日に西宮北口から阪神間を歩きました。

被災地を歩いて、私が一番強く感じたのは、自分自身の無力さです。

これだけの情報化社会の中で、そこだけポッカリと穴が空いたように、被災地にはまったくどんな情報も届いていませんでした。そして、同じように、マスコミで伝えられる映像も情報も、真実ではないと感じました。いても立ってもいられない思いで、現地に飛び込んでみれば、想像もつかないひどさで、言葉もなく、ただ唇をかみしめながら歩きました。誰にもぶつけようのない怒りと悲しみの中で思いました。

“この大地震は誰の身に起こっても不思議ではなかった。自然の気まぐれで、たまたま神戸に起きてしまった。私は神戸の人たちを救おうと思ったけれど、あの瞬間、救われていたのは私たちだった”と。人間が造った家や道路は崩壊してしまったけれど、草花も庭木も大木も、何ごともなかったように、自然のままの姿で立っていました。

その後、2度、神戸に行きました。27日は、深夜から早朝まで、被害のひどい長田区の小学校をまわって、ホームスティの呼びかけのチラシを張ってもらいました。

2月1日には、チェルノブイリ救援・中部で準備した医薬品と、寄せられた防寒着、下着などを積んで、車で神戸の町の中を配りながら、チラシを張りました。

私は無力です。でも、私はひとりの人間として、自分のできる限りことをします。ひとりでも多くの人が、自分のできることは何か考え、行動してほしいと思います。

（チェルノブイリ救援・中部代表　寺町みどり）

阪神大震災の被災者に安心して休める場所を

私たちは、阪神大震災でかけがえのない暮らしと住む場所を失い、避難所生活を続けている方たちの力になりたいと思っています。私たちは、阪神大震災の被災者に、緊急に安心して住んでいただく一時避難場所を用意しています。受け入れ家庭は、現在25件です。ポレーシェ読者で困っている方、兵庫県からの緊急避難を希望している被災者に、心当たりのある方は、**0581-22-4989**（寺町方）　へご連絡ください。

◎空室や、空家を一時避難場所として、被災者に提供して下さる方◎生活用品などの物資の支援をしてくださるも、連絡して下さい。　（チェル救・岐阜）

おねがい

〈チェルノブイリ原発事故処理作業員に車椅子を〉

前号の「ポレーシェ」や新聞報道等で，すでにお知らせしましたが，現在「チェルノブイリ救援・中部」では「車椅子」の寄付を呼びかけています．チェルノブイリ原発事故から９年目を迎えようとしている今，被災者からのたよりには「経済的な困難からチェルノブイリ事故の影響を取り除く計画は中止されてしまいました．・・・物価の高騰で人々の生活は生死の瀬戸際まで追いやられています．誰も，こうした状況の下で，障害者を援助することなどできないのです」「たくさんの障害者は車椅子が無いために外出することができません」「みなさまにチェルノブイリ原発事故の作業員に焦点をあてていただきたいと思います．１９８６年4月２６日の爆発の後も私たちが生き延びていられるのは彼らの努力のおかげだからです」と伝えてきました．私たちはこれらの現地の要請にこたえ，車椅子を募っています．1月２３日現在１４台が事務所の方へ届けられています．目標は３５台，みなさまのご協力をお願いします．

これまでに寄付いただいた方々（敬称略）

愛知県海部郡（加藤由美子）、名古屋市（道家茂、宇津木宏、前田宅幸、中園敏彦、佐竹幸吉）。 他に、『おもいやりの泉、名古屋店』からは新品車椅子５台を寄付いただきました。 予約；豊明市（相場としえ）、春日井市（山幸（株））。

《有給スタッフ募集》 希望者は事務所に連絡を！

チェルノブイリ救援・中部の事務所を開設して今年で４年目になります。現在専従スタッフ１名が週３回（月・水・金）事務処理にあたっていますが、チェル救・中部の活動が活発になり、仕事量が膨大な量になり、現在のスタッフ体制では、とてもこなせなくなってきました。そこで、パソコンを導入し（無償提供）、新たに有給のパートスタッフを募集することになりました。チェルノブイリ救援・中部の活動に関心のある、意欲的な方を求めます。

《条件》資格は特になし；パソコン、ワープロ操作、英語、ロシア語などができれば申し分なし。名古屋市内の方、大歓迎。
《仕事内容》事務一般；住所録管理、電話連絡、書類・資料整理ｅｔｃ。
《賃金》時間給８００円／時間；週３日（月・水・金10;30-15;30）交通費全額支給
《問い合わせ》「チェルノブイリ救援・中部」事務所
TEL/FAX ０５２－８３６－１０７３（月・水・金・10;30~15;30）

《ボランティア募集》 その他、ボランティアで手伝っていただける方、是非、一度事務所に連絡して下さい。お待ちしています。（発送など、簡単な仕事）

《事務局だより》　阪神大震災の被災地に行ってきた。何という凄まじい自然の力なのだろうと思った。そして、何というあっけない私たちの「街」＝暮らしなのだろう、と思った。崩れ落ち、焼け落ちた街の様子を目のあたりにして、ただただ「ワァー」「ア」だのと、言葉にならない言葉を発していた。

私たちが被災地に行った目的は、公的な援助の届かないところへ、直接確実に救援を行うために、その受け入れ先を探すことだった。すでに、現地へ行ったこととのある救援・岐阜の医師のアドバイスに従い、「無駄にならない」医薬品・衛生用品、衣類、湯たんぽ、マットなどをワゴンに積み込んで、早朝から夕方まで走り回った。

その中で、印象的だったのは、避難所の被災者と、テント生活の避難者の違いだった。避難所の被災者は、どうみても肉体的にも精神的にも限界に達しているように思えた。異臭漂う部屋や廊下に敷き詰められたふとんには、かなり厳しい状態の老人が横たわっていた。菓子パンや弁当、ジュースなど既製のものを、ただ「与えられ」そして何かをしてもらうのを「待つ」だけの日々の中で、無力感と絶望感はますます充満していくのだろう。その精神的ストレスは確実に病気を作り出していく。

一方、私たちの訪れたテント暮らしの被災者たちは、「当初風邪などでバタバタと倒れたけれど、今は大丈夫」と語る。煮炊き、洗濯など自分たちでテント生活なりの「暮らし」を作り出しているからだろう。朝など、あまりの寒さに目がさめるけれど、避難所には行きたくないとも語られた。もちろん、そこにいて孤独ではなく、支え合っていく関係があるからだろうけれど。

しかし、どちらにしろ、厳しい状況があることには変わりがない。

また、岐阜にホームスティの決まった方が、たった一人で避難してきた人の、どうしようもない孤独感を語られた。どれほど精神的ケアが必要か、そして、その為の具体的な手立てが必要かを感じる。岐阜で始めたホームスティの呼びかけは大きな意味があるように思える。

「被災者のために」というだけではなく、「被災者と共に」できることをやっていければと思う。

（山盛三千枝）

今号から　編集担当が救援・岐阜に変わりました。ご意見・ご感想など どしどしお寄せください。

事務局　〒466　名古屋市昭和区楽園町137　楽園アパート1－10
TEL.FAX. 052－836－1073　（月、水、金曜日10:00-15:00）

問い合わせはなるべく郵便で、できれば切手を添えた封筒を同封してください

◎チェルノブイリ救援・中部では、戸別訪問による募金活動は一切しておりません。不審なカンパ要請には充分にご注意ください。